

土橋未佳

私は幼い頃から保育師として働く母と、小学校の教員の父を見て将来は保育師か、国語の先生になりたいと思っていた。高校2年の夏、糖尿病の合併症や様々な疾患を患っていた祖父が自宅で倒れ、そのまま救急車で運ばれ翌日になくなった。救急車を待つ間、冷や汗をかき、あー、あーと声を発して苦しそうな祖父に対して何も出来なかったことが今でも悔しくて思い出される。亡くなった後、祖父が書きためていたノートに、看護師さんのことを書いた短歌を見つけた。不安な病院生活の中で、優しい看護師さんの存在に心が癒される、という内容のものだった。私は辛い様子や不安な様子を見せたことがなかった祖父の病気の辛さを知ったと同時に祖父にとって看護師さんの存在がとても支えになっていたことを知った。家族や友達が病気や辛い思いをしている時に、苦痛を和らげたり心の支えになりたいと思い、看護師を目指そうと思った。

大学に入ってから、看護の勉強とともに、大学のサークルでのよさこいの踊りを始めた。初のお披露目は大学の付属病院で患者さんの前での演舞だった。緊張して、不自然なひきつった笑顔で、夢中になって身体を動かし、踊った。最初は無表情だった患者さんの顔がだんだんとほころび、笑顔になっていた。帰り際には、涙まで流される患者さんもいた。私はこんなに喜んでくれるなんて・・・と信じられない思いだったが、とても嬉しく心が弾んだ。大好きなよさこいの踊りで患者さんや見てくださる方が喜んでくれる。自分が努力したことで、喜んでもらえる嬉しさを知り、看護に生かしていきたいと思った。

1年生の終わりに体験実習があり、一人の看護師さんに1日についてまわりたくさんの患者さんと接した。その中で、終末期にある患者さんが「自分は不幸だと思っていたけれど、今は水を飲めること、歩けること、小さなことに幸せを感じるし、そう思えるようになったのは看護師さんのおかげです」と話せるような関係をつくり、支えることが看護をするうえで大事ではないかと感じた。2年生になって初めて患者さんを受け持つ実習があった。今まで普通に生活していて、いきなり脳出血になり、左片麻痺で車いすの生活だった。リハビリの合間に、ふと「こんな体になってしまっただけで自分が情けない」と話された。私は言葉を返すことが出来なかった。私はなんて言葉をかけたら良かったのだろう。実習期間中、いつもその言葉が頭から離れなかった。実習の最終日、離床を促すという看護計画で患者さんと書道を行った。以前書道の先生をしていたということを知り、また書きたいと言っていたからである。筆を持ち、いきいきと文字を書く姿はいつも見ていた患者さんとは別人だった。周りの患者さんや看護師さんからお褒めの言葉をもらって誇らしげな姿は、なんだかとても眩しく見えた。私は、「病院での患者さん」の姿ではなく「本来の自分らしい患者さん」を初めて見た気がした。私が踊っている時に自分らしく輝けるように、患者さんは書道をしているときに自分らしく輝いていたのだと思う。これから患者さんと接していくとき、患者さんの自分らしさ、どんなときが輝ける自分なのかを探ることを大切にしたい。そのために患者さんに関心を持ち、本年を言える関係を作りたい。そして、今の自分にできる、今の自分だからこそできる看護をしたいと思う。